

# 特集

## ヒトのアタッチメント再考

ヒトを含むほ乳類動物は、ホメオスタシスが急激に崩れると養育個体の身体に近接し、接触する（アタッチする）ことで生存可能性を高める行動制御システムをもっています。ボウルビィは、幼少期に特定の他個体に対し、「いざとなればいつでもくっつける」安定的な関係（絆）を築くことがその後の心身の健康に大きな影響を与えると考えました。この見方は、現在の育児や教育現場にインパクトを与え続けていますが、アタッチメント対象は母親であるべき、母親からの情愛の深さが子どもの健全な成長を左右するといった過剰な解釈にも根拠なくつながっているように思います。しかし、ヒトを生物の一種とした見方を根幹にすると、旧世界ザルの母子、そして、欧米圏の白人中流階級に特化したステレオタイプに基づく旧来のアタッチメントの解釈は再考すべき点が多いのです。

本特集では、ヒトにとって適応的に機能するアタッチメントとはどのようなものであるかを、文化人類学、児童精神医学、霊長類学、社会内分泌学から最先端の知見を提供いただき、再考したいと思います。

**(明和政子)**